

ピアノの恋

大人の童話
幸せのレシピ



文 小原麻由美
絵 小島加奈子

秋の始まりのしんとした黄昏の中に、白亜の家は建っていました。広間には一台のピアノと、脇には黄ばんだレースの掛けられた丸椅子がありました。座るとガタガタと音がする古い椅子は、いつもピアノのそばにいました。

カタリと、広間のドアが開く音がしました。葡萄酒色の瞳、栗色の髪をマッシュルームカットした青年が、静かに丸椅子に座りました。

青年の細い十本の指が鍵盤の上に置かれ、その指が滑らかに動き出すのを、ピアノは胸をときめかせながら待っています。ピアノは、青年の指に恋していました。青年の心の声を音にできることが、ピアノ

のただ一つの喜びでした。

椅子はピアノが頬をピンク色に染め笑っている様子を、ただただ見つめていました。

今日もピアノは、キンモクセイの香りに抱かれながら、青年がやってくるのを待っていました。

青年が鍵盤を叩き始めると、ピアノは微笑みを無くしました。その美しい指から、途方もない悲しみが伝わってきたのです。

しばらくすると、音はフツリと途切れれました。青年は息苦しそうに手で胸を押さえ、ポロリと冷たい涙を鍵盤の上に残して、広間を出て行ってしまいました。

その日から青年は、姿を見せなくなりました。

ピアノはあまりの寂しさに、何日も泣き続けました。椅子はピアノに声をかけるわけでも慰めるわけでもなく、ただそばにいて見守り続けました。

夜半の雨が上がりました。一斉に咲いたキンモクセイの花は一斉に散り、庭はオレンジ色の絨毯を敷いたようになりました。

ヒュンと、広間のカーテンが揺れました。森の向こうからやってきたつむじ風が、あ

ることを知らせるためにやってきました。ありがたいことにその知らせは、泣き疲れて眠っているピアノの耳には入りませんでした。椅子が知らせを聞いて呆然としていると、バタバタバタと、広間の床の上が騒がしくなりました。

あれからどれくらいの年月が流れたでしょうか。ピアノはある街のジャズバーにいます。ステージの奥の壁にびったりと背中をつけて、窓から見える景色だけを眺めながら静かに過ごしていました。

「こんにちは」

ある昼下がり、一人の青年が店にやってきました。青年は店の中をキョロキョロと見回し、「あっ……」と声を漏らしました。青年は目を輝かせ、一点だけを見つめています。その進む先にはピアノがありました。

「随分待たせたね」

青年はにっこり微笑んで店を出ていくと、車のトランクから古びた丸椅子をおろして、また店へ戻ってきました。

「ピアノを預かっていただいて、ありがとうございます」

青年は、店の主人に頭を下げました。

「お体はもう大丈夫ですか？」

「はい、外国での心臓の手術がうまくいって元気になりましたが、リハビリに時間がかかって遅くなりました」

「そうですか！ それは良かったです」

「このピアノ……」

店の主人は、口ごもりました。

「どうかしたんですか？」

「ここへ来たときから、音が全く出なかったんです」

「えっ？」

青年は持ってきた丸椅子をピアノの前に置きました。そっと蓋を開けて、手入れされた艶やかな鍵盤をじっと見つめました。ガタガタと座りの悪い椅子でしたが、青年は懐かしそうに座り、鍵盤の上に指を置きました。

「おやっ？ 音が出るぞ！ 今まで一度だって出なかったのに」

店の主人は叫びました。

ピアノはあの頃と同じように、青年の指の力強さや優しさを感じながら、喜びの音を奏でました。

最後の一言が鳴りやむと、青年はその指でピアノをなでながらささやきました。

「さあ、一緒に帰ろう」

(おわり)



次回10月18日に掲載

文 小原麻由美 1969年、名古屋市生まれ。保育士を経て児童文学作家に。代表作に「ありがとうの道」(PHP研究所)、「キユンすけのおくりもの」(三恵社)がある。

絵 小島加奈子 1969年、愛知県大府市生まれ。北海道由仁町在住。画家、イラストレーター。93年、愛知県立芸術大学大学院修了。北の自然と奇り添い暮らす。